「シンセサイザーの教育・実践への活用」

領域名：教養科目・専門関連科目

報告者：金城芳秀

教育及び実践の課題

新型コロナウィルス感染症（COVID-19）のパンデミックに伴い、インフォデミック（infodemic）に警鐘がならされてきた（WHO, 2020）。インフォデミックは健康に害を及ぼす可能性のある混乱と危険を冒す行動を引き起こし、保健当局への不信につながり、公衆衛生への対応を弱体化させかねないとの認識である。グローバル社会におけるソーシャルネットワーキングサービス（Social Networking Service: SNS）を介した虚偽または誤解を招く内容を含む情報に惑わされないためには、いま何が必要であろうか。

活用した論文の概要

Yu & Shen (2021)は、COVID-19 の初期発生時に、3,000 人の中国のインターネットユーザーを対象にオンライン調査を実施した。その際、「COVID-19 の知識」を従属変数として、「ファクトチェックの習慣」、「一般的な科学知識」および「否定的な感情」を独立変数、インターネット使用状況といくつかの人口統計学的変数を制御変数として重回帰分析を行った。その結果、パンデミック時には、定期的に情報を確認していても、科学知識が不足している場合や否定的な感情に影響されている場合は、質の高い情報を入手できない可能性があり、公衆衛生の危機に健康知識を促進するには、基礎科学リテラシーを促進する必要があること、危機が人口集団に与える心理的影響を考慮する必要があることを報告した。

教育及び実践への活用

2021 年後学期は COVID-19 禍の終わりがみえないなか、「保健医療情報演習」では、1) インフォデミックの例示、2) ファクトチェッカーのチェック例示、3) チームで考えるファクトチェックの方法、4) 看護職者の新たな役割の提示、としてチームレポートの作成に取り組んだ。学生が注目したインフォデミックは、COVID-19 ワクチン接種から、子宮頸がん予防の HPV ワクチン、HIV/AIDS、ハンセン病、福島第一原子力発電所事故まで多岐にわたった。チームで考えるファクトチェックの方法では、認知（確証、正常性、同調性）バイアスあるいは三た論法を疑う（使った、なおった、だから効いた）、複数の情報源での確認など、前学期の「疫学・保健医療情報」を土台に批判的に情報を捉える姿勢が示された。たとえ善意でも、医学的に不確かな情報が情報を受け取る側の不安を煽り、その行動選択に影響を与えるなど、身近な問題として情報社会が避けられない負の側面を考える機会となった。今後、看護職者として新たな役割を担う上でも、SNS 上での流言流風を鵜呑みにしないためにも、科学リテラシーを高めると同時に、自らソーシャルメディアを活用して、意思決定支援に挑戦する必要がある。

参考文献

Yu W. & Shen F. (2021). Does fact-checking habit promote COVID-19 knowledge during the pandemic? Evidence from China. Public Health, 196, 85-90.

2022 年 9 月 15 日作成